

# 空虚な遁走と果敢な発足

## ——梅崎春生「蜆」論

富永彩香

### 〈要旨〉

梅崎春生は、敗戦後日本の市井生活に焦点を当てた作品として小説「蜆」(『文学会議』一九四七年十二月)を発表した。

「蜆」は主にエゴイズムの容認や肯定といった観点から論じられてきた。その一方で見逃されてきたのが、おっさんの死や外套の釦(男)の失職、追剥など、「弾く」「弾かれる」というモチーフである。本稿では、以上のモチーフの分析を中心に、作品の舞台が敗戦後日本であることを踏まえ、「個人」の意識に着目して物語を読み込んだ。

結論として、(男)が外套を着用することは、彼の輪郭を「善人」として彫り込み、その一方で(僕)の不鮮明な人物描写は、「酔い」の映し出す景色に停滞し、滲んでいく彼の曖昧な輪郭を示していた。

本稿の構成は以下の通りである。

- 一、はじめに
- 二、「蜆」の語りの構造——退屈からの脱出
- 三、弾き、弾かれて生きること
- 四、外套が被せるもの
- 五、(僕)の「酔い」
- 六、結論

## Empty Fugue and Bold Inauguration Haruo Umezaki's "Shijimi" Theory

TOMINAGA Ayaka

### Summary

Haruo Umezaki published his novel "Shijimi" (Bungaku Kaigi, December 1947) as a work focusing on the life of a common man in post-defeat Japan.

"Shijimi" has been discussed mainly from the perspective of acceptance or affirmation of egoism. On the other hand, what has been overlooked are the motifs of "pushing away" and "being pushed away," which can be seen in examples such as the death of the old man, ripping the cloak button, the loss of the "man's" job, and robbing the cloak. This paper, focuses on these motifs and analyzes the consciousness of the "individual" in light of the fact that the work is set in post-defeat Japan.

In conclusion, the cloak that the "man" wears enables him to have a definite character as a "good man," while "I" cannot define his character as he tries to blur his consciousness and makes it inactive by drowning himself in alcohol.

The structure of this paper is as follows.

1. Introduction
2. The structure of "Shijimi's" narrative: Escape from boredom
3. Playing and being played to live
4. What the cloak covers
5. "Drunkenness" of "I"
6. Conclusion

一、はじめに

〔桜島〕(『素直』一九四六年九月)を発表したことで「戦後派」として位置付けられた梅崎春生は、翌一九四七年に「自分がいま生活している日常的世界」を、小説「蜷」(『文学会議』一九四七年十二月)に描き出した。一度は〈僕〉に外套を譲った〈男〉がふたたび外套を取り返すと、しばらく経って再会した〈僕〉に一連の出来事を話し聞かせる。〈男〉の物語が囲い込まれた〈僕〉の回想が「蜷」という小説である。まず、その概要をたどっておきたい。

「偽者はかり」の世の中で、「酔いだけは偽りない」と酒を飲む〈僕〉は、「人から貰う側よりやる方になりたい」〈男〉から外套を譲り受ける。しかし後日、泥酔してベンチに横臥していた〈僕〉は〈男〉に外套を剥ぎ取られるのだった。数日後に再会した〈男〉は再就職の相談のために友人を訪ねた日の一部始終を語り出す。

友人に冷たくあしらわれたことで、「一層のこと闇屋にでもなったるか」という思念が〈男〉に湧きあがる。さらに、その思念を実行しかねない「兇暴」な心の姿勢が、〈僕〉から剥ぎ取った「外套」によって与えられていることに愕然とするのであった。

〈男〉は、「贓品」と化した外套をまもって乗り込んだ満員電車のなかで、若い女に代わり、過剰な「義侠心」によって扉のない扉口に立ったおっさんと隣り合う。カーブに差し掛かった反動で〈男〉の肩に身体を突かれたおっさんは、疾走する電車から転落してしまふ。〈男〉は終点で、おっさんが残したりユツクを担いで帰宅し、そのなかに詰められていた蜷を翌日売り捌いたのだと話す。

「闇屋」という新しい出発を決意し、外套を売り払うと告げる〈男〉に、〈僕〉は「も一度だけ俺に着せてくれないか」と頼み、取れかかっていた釘を引きちぎる。〈僕〉の手元に残った釘は下宿の子どもの玩具となったが、もはや遊び飽きられたようであった。

次に、「蜷」に関する先行研究を整理したい。三浦和尚は「蜷」の語り手について「とりあえず一人称の「僕」で語られる」が「途中完全に「俺」に取って代わる」と述べ、この形式を「俺」の話を中心とした「入れ子型」構造とした<sup>二</sup>。語りばかりでなく、渡部裕太の指摘するように、「僕」自体がどのように生きているのが作中ほぼ示されないこともあって、「蜷」という作品世界から、語り手「僕」を読みだすことが困難になって<sup>三</sup>おり、〈僕〉は「退屈」な日々を「粕取焼酎」で酔って過ごす人物として描かれる。

語りの複雑性に加え、〈僕〉の秘匿性は、「蜷」の読みにたやすく「梅崎春生の思想の、あるいは敗戦後日本の思想の象徴」を持ち込むこととなった<sup>四</sup>。「蜷」にエゴイズムの問題を見出した古閑章は、「小説の設定としての社会的混乱や人心の乱れに、現在及び将来の『飢え』の一項を付加することで、そこに主人公の心理の変化(悪へエゴイズムの逡巡から悪の肯定)を展開し、『羅生門』的世界」を戦後社会に焼き直したのだと読み、「生きるためのエゴイズムを積極的に容認する立場から執筆された」作品と評した<sup>五</sup>。戸塚麻子は、梅崎の随筆「エゴイズムに就て」から、「戦中とはまた異なった新たな極限状況の中で、人が餓死することなく生存を保っている」とすれば、それは例外なく他人の犠牲の上に成立している」といった意識が「蜷」に持ち込まれた

のではないかと言及している<sup>六</sup>。また、高木伸幸も「蜆」の読みの傾向について「かつて「真面目な会社員」であった「男」が、闇屋になる勇気を得ていく心境の変化の過程」を語る、告白の内容こそが、エゴイズムの肯定を強化していると論じた<sup>七</sup>。三浦は、「蜆」における人々の姿を「絶望、諦めの転化としての明るさ、軽さ」と捉えた<sup>八</sup>。

以上の指摘を整理してみたい。まず、卑俗な市民生活のなかで抱かれる飢えの予感が、主人公の心理に悪の肯定（＝エゴイズムの積極的な容認）を展開させる。他人の犠牲のうえに自身の生存が保たれているといった現実の認識は、戦後の日本人に珍しいものではなく、〈男〉もまた「人間の無意識のなかにある悪意の認定」と「本質的な善意の否定」に辿り着く<sup>九</sup>。

「エゴイズム肯定」といった読みの特質は、〈男〉の葛藤の描写を削り捨てている点にあるといえよう。〈男〉の現実には、自身の生存が他人の犠牲によって成立している認識が抱かれたのは確かであり、〈男〉の決意のみを掬い取れば、彼が「エゴイズム肯定」を取った人物であるという指摘は説得性を持つ。

「蜆」は主にエゴイズムの容認、肯定といった観点から論じられてきた。その一方で見逃されてきたのが、お弾きやおっさんの死、鉦や失職、追剥など、「弾く」「弾かれる」というモチーフである。以上のモチーフは、作中でひそやかに、しかしきわめて意識的に多用されている。そのため、本稿では「僕」と「男」を介する外套を中心に、停滞した現実と直面した〈男〉が「力づくで剥ぎ取った「贓品」としての外套の感触やその鉦が果たす役割など、物語の細部にふたたび着

目して分析をおこなう。

〈男〉については、おっさんが突き飛ばされた際に発生する「笑い」を中心として、乗客らの笑いと〈男〉の笑いを比較し、おっさんの死による〈男〉の心境の変化を追って整理することで、リュックを掠め取った夜の激しい葛藤について検討していく。

〈僕〉についても、執拗に繰り返される「酔い」ばかりでなく、人物としての描写が非常に不鮮明であることなど、分析の余地は多く残されている。「偽者ばかり」の世の中を退屈に思い、外枠の語り手として「蜆」の物語を語り直す〈僕〉の人物像がなぜ秘められているのかについて考察をおこなっていきたい。

弾き、弾かれながら平然と維持されるもの、「二人が幸福になれば、その量だけ誰かが不幸」になる「醜悪」な地平を、犠牲として弾き弾かれて生き延びねばならないとき、「蜆」が「終戦直後の荒廃した社会」が舞台であることを踏まえ、「個人」の意識に着目して物語を読み込むことを目的として掲げる。

## 二、「蜆」の語りの構造―退屈からの脱出

本章では、〈男〉が〈僕〉に二連の出来事を話し聞かせ、〈僕〉が彼の話の回想として語り直す構造について見ていきたい。

三浦は「蜆」の「入れ子型」構造について「入れ子の中身である「俺」の物語と、入れ子の外枠である「僕」の物語」とに大別されるが、「基本的な枠組み・語り手はあくまでも「僕」である」と述べた<sup>一〇</sup>。

枠物語、「入れ子型」構造について、籠碧はシユテファン・ツヴァ

イク作品から「一人称である外枠の語り手、「私」に対して、枠内の語り手が、自分自身の体験談を一人称で語る」といった特徴を挙げる。また「奇妙なのは、外枠を取り外しても話が成立するように見えることだ。つまり枠内物語だけが独立し、(中略)ほとんどあらずじに影響がない」ため、「外枠と「私」が取り払われて、枠内物語が三人称小説か内的独白の小説として独立」した方が整うのだと指摘する<sup>二</sup>。

「蜷」は、なぜ「僕」という「外枠」によって語り直されねばならなかったのだろうか。渡部は、「蜷」の「作品全体が「僕」の回想」であることから、「以下が珈琲をすすりながら彼が物語った話である」という前置きは「この後に続く鉤括弧付きの彼の長い語りを「僕」が回想として再構築」しており、「男」の「物語った話」もまた「僕」という語り手による物語の一部であり、(中略)「僕」による編集を免れ得ない」とする<sup>三</sup>。

〈男〉の物語を語り直し<sup>一</sup>「再構築」することで、〈僕〉は語り手となり、物語は〈僕〉の編集と介入を拒めない。しかし、籠碧が「入れ子型」構造について「枠内物語だけが独立し、(中略)ほとんどあらずじに影響がない」<sup>二</sup>と指摘するように、〈男〉の物語が〈僕〉による編集を免れ得ないとしても、「蜷」はその痕跡をとどめない。〈僕〉の語り直しは、「蜷」を物語として再構築したのではなく、自身の現状認識に働きかけたのではないか。渡部は、一連の話のあと、酒でなく「冷えた珈琲」で〈男〉に乾杯を求める〈僕〉を「男」の話と決意を、「にせもの」ではない」と捉えたものと指摘する<sup>四</sup>。本物ではないが、偽物でもないのである。

〈僕〉にとつて、「蜷」の出来事は「にせもの」でなく、さらに「退屈しない」ものとなる。退屈を処するために求められる「酔い」の回復に「蜷」の回想が加わっていく。〈僕〉の現状認識「偽者ばかりが世の中にいる」といった退屈からの一時的な脱出として、この回想は〈僕〉に働きかける。「蜷」の出来事が回想されるとき、語り直す〈僕〉の「退屈」が浮き彫りになるのだ。

〈僕〉と〈男〉の偶然の出会いには、「現状維持」に徹する〈僕〉と、義侠心を「現状」から締め出して、新たな生活(闇屋という生き方)を試みようとする〈男〉の時間的な交錯でもあった。偶然にもかかわらず、物語内で〈僕〉と〈男〉が何度も出会うのは、二人が「現状維持」という同じ時間のなかで生を模索していたためであろう。

### 三、弾き、弾かれて生きること

〈男〉は、満員電車のなかで次のように想起する。

俺は揺られながら、先刻の気持を反芻するように思い出していた。あの駅の前の気持は一時の露悪的な亢奮じゃないのか。そうも考えた。しかしその荒んだ気持はその時もまだ続いていた。先刻のような毒々しい喜びはもはや消えていたが、その代りに静かな怒りのようなものが、俺の胸いっぱいに拡がっていた。俺は俺の過去のことを考えていたのだ。

就職の相談のために訪れた船橋で友人に冷ややかな対応を受けた

〈男〉は、「腹を立てて直ぐその家を飛出した」ときの「兇暴」な「亢奮」を満員電車に持ち込んでおり、以降の場面で描かれていく〈男〉の心情は「毒々しい喜び」の跡に拵がった「静かな怒り」を土台として湧き上がるのだ。

次に、おっさんが車外に落ちて行ったあとに巻き起こる「笑い」について考えてみたい。おっさんは〈男〉と「身体を接する」位置において、電車に揺られて〈男〉は彼の身体を肩で弾いてしまうのだった。

誰が落ちたというんだ、ざわめく声中で、

——誰だっというじゃねえか。明日の新聞読めば判るよ。

あののんびりした声だった。どっと笑い声が上がった。俺の近くでも皆笑った。(中略)

お前はその言葉をユウモアだと思っか。

俺は思わん。思わんが俺も笑い出していたのだ。俺は可笑しくはなかった。しかし笑いがしゃつくりのように発作的にこみあげて来るのだ。俺は扉口にしがみつき、全身をわななかせながらヒステリーのように笑いこけていたのだ。俺は涙を流しながら、ヒイヒイと笑いつづけた。

柴原直樹は「笑い」の本質を「他人を軽蔑し見下すことから生ずる快感、つまり優越感」にあると指摘した。柴原は「他人の劣等性または過去の自分の劣等性と比較して、現在の自分の優越性を突如認識することから生ずる勝利の感情」の一方で「自分よりも遥かに上位に位

置する他者」の転落する姿がもたらす「笑い」は、彼らの「卑俗化」によって生ずると述べた<sup>15</sup>。

おっさんのリュックには蜷が詰まっていた。「なりは闇屋」であったことから、それは翌日の売りものである可能性が高い。おっさんが落ちてしまう直前の「——にいさん、ちよ、ちよと。押し、押さないで。このリュックを……」といった喘ぎは、彼が明日の生活を守るうとしていたことを示すといつてよいだろう。

〈男〉は、おっさんが突き飛ばされたとき、かつて「おっさんの脚と俺の脚の間」にあったリュックを「両足でしつかり」はさみ込んでいた。おっさんの喘ぎが〈男〉の両足をリュックに向かわせたのだとしたら、それは、おっさんの一部であるリュックを生側の側に留めようと「とにかく身動きができない」車内で施された、咄嗟の善意であったといえるのではないだろうか。

しかし、おっさんが突き飛ばされたことで、過密な今日が「いくらか凌ぎよく」なる。その途端、車内に溢れ出したのが、乗客の「——誰だっというじゃねえか。明日の新聞読めば判るよ。」といった皮肉から拡大した笑いであった。一方、〈男〉のヒステリックな笑いはおっさん（＝「義侠心の過剰な人物」）の死が「過去の自分」の「善意」の卑俗化をもたらしたためでもある。

かつて、〈男〉は会社の解散会の帰りに会計係の老人を「何の喜び」もなく駅まで担ぐ。電車に押し込まれた老人は、彼に「お前さんは善い男だよ」と囁くのだ。その直後、電車は「俺を歩廊に残して」出て行った。このことがきっかけとなり、〈男〉は「もう一度何かを確め」

たくなる。(男)はこれまで、「善人」であろう、「善」くいようと努めてきたが、その努力が、むしろ自身を独り取り残していくのだ。(男)は醜い亢奮や「嘔きたい気持」を「二所懸命に押えていた」が、それはのちのヒステリックな「笑い」として彼から噴き出す。三浦が(男)の笑いを「おっさんに自分の姿を重ねて、善良さや善意が結果として何にもならないということ」<sup>二六</sup>の自覚だと述べるように、(男)が「涙を流しながら」笑いつづけるのは、これまで努めてきた善意への強い違和感、「何か」のすべてを確かめ、納得し終えた彼の自嘲であり、落胆であった。

そして、持ち主を喪ったリュックと、これまでの信念が打ち砕かれた(男)は、今日に取り残され、行き先を喪ったもの同士として終点で結びつくのだ。

(男)は、おっさんのリュックを担いで帰った夜のことを次のように回想する。

妙な話だが、おっさんのリュックをかついで来たことについて、俺は何の背徳感も感じていなかったのだ。気持の抵抗も全然なかった。俺は自分の持物のようにリュックを易々と掠めていたのだ。これはどういうことだろう。

まず、ここで確認しておきたいのが、(男)が(僕)に語り聞かせた話は、「闇屋」となった(男)の語りであるということだ。おっさんの義侠心の成れの果て、「非業の死」を直視したことは、(男)の決

意から、一層強く義侠心を締出したのではないだろうか。

前述したとおり、おっさんの死によって「ヒステリックのように笑い、涙を流していた」のは、(男)の自嘲である。「途中何度もおいて帰ろう」と思うほど「おそろしく持ち重りのするリュック」をけつして下ろさなかったのは、その重みが(男)を徐々に「亢奮」、「ふるえ」から冷ましていったからではないか。おっさんの死という「血も凍るようなおそろしい瞬間」と、電車内のヒステリックな笑いへのまれ「涙を流しながら」笑いつづけた自身の「亢奮」が掘り起こされ、そこから「沈鬱な気分」が漂い始めるのだ。

(男)はリュックを掠めとった夜のことを「俺は何の背徳感も感じていなかったのだ。気持の抵抗も全然なかった」と回想し、「帰り着くまでに何度このリュックを捨てようと思っただか知れやしない」と語る。リュックを持ち帰ることで、置き去りにされたおっさんの明日は(男)に拾われることとなる。それは、自身の今日(信念)を失って、他者の明日を生きていく姿である。失職した(男)は、他者からかすめ取ることで明日を掴んだのだ。(男)がリュックを何度も捨てようと思っただのは、自身の明日が他者の今日を犠牲にしていることへのうしろめたさであろう。また、かつて「闇屋」に落ちるには俺は良識と教養があり過ぎる」と己惚れていた(男)の葛藤でもあり、「何の背徳感も感じていなかった」、「気持の抵抗も全然なかった」と自嘲することと、良識を捨てようとしているのではないか。その果てに、(男)の信念は「俺が何時も今まで自分に言い聞かしていたことは何だろう。善いことを念願せよ。惜しみなく人に与えよ。俺は本気でそれを信じ

て来たのか」といった疑念に膨張する。

〈男〉の心境の変化は、自身を幽閉していた信念からの脱出として結ばれる。過剰な義侠心を強いていた頃の自身を攻撃することで、「こんな鑑は必要」ではなくなっていくのだ。〈男〉の自嘲は、良識に背く行動を取った、外套にふさわしくない人間として自身を正当化し、そのような自身を赦すといった役割を果たす。

「リュックの蜷は「淋しい声」、「気も滅入るような陰気な音」で〈男〉を蝕む。そして、〈男〉はついに「喜びを伴わぬ善はありはしない」と、「今まで赴こうと努めて来た善が、すべて偽物であった」と覆すのだ。「おっさん」の義侠心は「ひとつの外套の釦」と「非業の死」を代償に得たに過ぎないと〈男〉は語り、「あのおっさんと、殴られた会計係と、ケラケラ笑い続ける娘と、お前と、それから俺を取巻く色んな人と、俺」を含めた「平面の中の構図」を突如描く。

こんな狭い地帯にこんな沢山の人が生きなければならぬ。リュックの蜷だ。満員電車だ。日本人の幸福の総量は極限されてんだ。一人が幸福になれば、その量だけ誰かが不幸になっているのだ。(中略)釦を握った死体と、啼く蜷と、舌足らずの女房と、この俺と、それは醜悪な構図だ。醜悪だけれども俺は其処で生きて行こう。浅墓な善意や義侠心を胸から締出して、俺は生きて行こうとその時思ったのだ。――

おっさんのリュックを掠め取った〈男〉は、「平面」をなした「醜

悪」な構図のなかを、「浅墓な善意や義侠心」を締出して生きていくと決意する。三浦は「平面の中の構図」を「善意あるいは偽善の破綻」の自覚であると述べた<sup>17</sup>。

ここで立ち現れる「醜悪」な「平面」の構図とは、〈男〉の外套が纏わせていた「浅墓な善意や義侠心」の崩壊によって拓かれた地平なわけではないか。それは「浅墓な善意や義侠心」といった突起の弾かれた地平だ。おっさんの「非業の死」によって、〈男〉は平面の構図に立たされる。誰もが、「一人が幸福になれば、その量だけ誰かが不幸」になるといった同様の条件のもとに置かれ、あるがままに今日を生き延びねばならないという状況にある。その醜悪さであろう。

#### 四、外套が被せるもの

本章では、外套を「着る」ことで〈男〉に抱かれる意識と、〈僕〉を経由したことでもたらされた変化について分析をおこなうこととしたい。

歩いているながら、どうもびったりしない。何か食違ったもの、何かそぐわぬものを俺は、不透明な膜の向うに感じ続けていたのだ。(中略)外套が身体に与える感触じゃない。もつと根元的なものだ。それは、俺の心の姿勢だ。これは俺の外套だ。しかし俺のじゃない。昨夜ある男から剥いだのだ。――こいつだ。これが胸の底にかくれていて、それがこんな感じを引き起していたことに、俺は今はずきり気がついた。俺はある荒んだ勇気が猛然と湧き上つ

てくるのを感じながら、次のように呟いたことを想い出す。

——俺は贓品を身につけているのだぞ。

外套が「贓品」となったことで、突如〈男〉に「荒んだ勇氣」が湧き上がる。かつて、〈男〉は「物貰いじゃない」から「他人の慈善は受け」ないと〈僕〉に聞かせた。用事のため「外套がないと都合が悪」くなつた〈男〉は力づくで〈僕〉から外套を剥ぎ取つた。

しかし、友人は「今どき就職口などあるか」と〈男〉を突き放す。就職口を見つけられぬまま船橋を後にする〈男〉は、「欲しくなれば、(中略)力づくで剥ぎ取る」ことすら叶わないのだ。もはや他人の慈善なしには「女房子供が飢え」てしまう、停滞した現実に向面したとき、〈男〉は「一層のこと閨屋にでもなつたらか」と吐き捨てる。

〈男〉は「人から貰う側よりやる側になりたい」と「自分に言い聞かして」いた。しかし、「貰う」ことも「やる」ことも困難になつたことで、「力づくで剥ぎ取」つた「贓品」の感触が、これまで「言い聞かして」いた心の姿勢を食い破り、「荒んだ勇氣」を喚起するのだ。

〈男〉の外套を譲り受けた〈僕〉は、ふたたび彼に出会う。〈男〉は、いまや「他人が着用している外套」の「由来や来歴」を大声で「講釈」し、彼の姿は「口惜しがっている」ものとして〈僕〉に認識される。これは、鷺田清一の指摘する「存在の輪郭を補強することで、じぶんのものい存在がかもす不安をしずめようとする」<sup>18</sup>ことではないだろうか。〈男〉が外套を着用することは、「(像)としての身体のもろさ」を補強<sup>19</sup>し、「身体のあやふやな輪郭」を浮き彫りにする<sup>19</sup>ひとつの手

段であつた。〈男〉の外套は、彼の身体の「あやふやな輪郭」を「善人」として彫り込んだといえよう。「あちこち摺り切れ」た〈男〉の背広、つまり、むき出しの脆い輪郭は「講釈」というかたちで「補強」される。また、鷺田は「じぶんの存在が他者にとってわずかでも意味がある」と感じられるかぎり、「じぶんを見失わないでいられる」ため、「他者の世界のなかに妄想的に意味ある場所をつくり上げる」とした<sup>20</sup>。〈男〉の「俺は人から貰う側よりやる側になりたいと思う」信念が目指すのは、「他者の世界」のなかに、「やる側」として「意味ある場所をつくり上げる」ことだつたのではないか。

次に、外套の「釦」について見ていきたい。渡部は、〈男〉の「この釦は俺の祖父さんが、撃取つた鹿の骨だ。九州は背振山よ。六角形してるだろ。いい職人だつたぜ。そこの釦とは違うんだ」といった講釈から、外套の「釦」を「自身の出身、ルーツに対する誇りの象徴」と読んだ<sup>21</sup>。また、高木は六角形の「釦」が六つ付いているといつた特徴から「善いことのみを行え。悪いことから眼をそむける。困つた人を見れば救つてやれ。人に乞うな。人から奪うな。人にすべてを与えよ。」との、いわば六つに分けた善行」に当てはめて読んだ<sup>22</sup>。

外套の「釦」は〈男〉の「六つの誓い」と「出身やルーツに対する誇りの象徴」を担うものとして読まれる。外套は鎧のように纏われ、さらに「標準語」の憑依として、釦が留められるのではないか。多くの標準語話者が行き交うであろう生活圏に身を置き、〈男〉は「じぶんを見失わないで」いるために、標準語に自身を托したのだ。しかし、今や彼の輪郭は標準語圏のなかに薄らぎ、与えることも養うこともま

まならず、次第に彼の標準語は空疎な言葉となっていく。

渡部は、女房の「ことば」を「江戸弁の特徴」と指摘し、彼女の訛りを「都度都度矯正せねばいられない」(男)について、「神経質さがあるいは自己のルーツを「九州は背振山」に求める」姿を見た。

しかし、女房のことばを怒鳴りつけるのは、空虚な自己が揺るがされながらも撤退しようがなく、「無感動」に呑み込まれていくことへの抵抗として表出されているのではないか。

## 五、〈僕〉の「酔い」

〈僕〉は「偽者ばかり」の世の中を退屈に思い、「酔いだけは偽りない」として酒を飲む。

「退屈だとお前は飲むのか」と男が聞き返した。

「そうだよ」

「何故退屈するんだ」

「偽者ばかりが世の中にいるからだよ」と僕は答えた。「俺はにせものを見ていることが退屈なんだ。だから酔いたいのだ。酔いたいだけは偽りないからな。酔ってる間だけは退屈しないよ。」

戸塚は、〈僕〉という人物について「虚偽に満ち溢れた現実を前に、絶望を「退屈」にすり替えることよって身を処する二ヒリスト」と指摘する<sup>三三</sup>。渡部は「どうやって生計を立てているのか描かれな<sup>三四</sup>い」人物であるとし、三浦は「人物として必ずしも十分に描かれ

ているわけではない」<sup>三五</sup>と述べた。まるで匿うかのように、〈僕〉の姿は「酔い」においてのみ、ひらかれている。

「清酒を飲まずに代用焼酎で我慢しようという精神は悪い精神だ。止したが良からう」といった〈男〉の発言に対して「お前は何か勘違いしてるよ」と返すことや、「——お前が言うほどの面白い話でもなかったが、……退屈はしなかったよ」といった〈僕〉の反応から、三浦は「僕」はすでにこの男(俺)の認識に達した上で、この話を感動もせず驚きもせず、いわば当然のこととして受け止めている。(中略)「俺」の認識を追認し、根底にある絶望をさらに深める形となっている」と述べた<sup>三六</sup>。三浦の指摘のとおり、〈僕〉は〈男〉の出来事を「当然のこととして受け止め」たうえで冷たく突き放している。

ならば〈僕〉はいつたい、いつ「この男(俺)の認識」に達したのであろうか。本章では「蜷」の構造および物語空間を踏まえて〈僕〉の「酔い」や「退屈」について分析をおこない、彼がどのような人物として描かれているかを明らかにしていきたい。

はじめに、「蜷」の物語空間は「敗戦後日本」である。

日本は敗れたんだ。

〈男〉の語りであるが、「敗れた」という意識はおっさんのリュックを背負って帰宅した彼に「幸福の総量」の極限と「生き抜くことが最高のこと」であると痛感させる。次に、古着屋に売り払われようとする外套を〈僕〉が着せてもらった場面を見てみたい。

郷愁を誘うような毛外套の匂いがしつとりと肩や背に落ちた。立てた襟が軟かく頬をくすぐった。冷えた体がやがてほかほかぬくもつて来た。僕が言った。

「これは俺に丁度いいよ。俺のために仕立てたと思う位だよ。」

〈男〉が渡した外套の着心地は〈僕〉の「郷愁」を呼び起こす。この「郷愁」の詳細は描かれないが、何かしらの社会組織に所属していた頃を懐かしんでいるのではないだろうか。失職直後の〈男〉に対し、〈僕〉とは、ある社会組織から弾かれ、いままも接続していない、またはできていない人物であると言えよう。

推測の域にとどまるが、「戦後」に「毛外套」を懐かしむような人物として、まず連想されるのは軍人ではないだろうか。ここで、「旧日本陸軍用防寒外套および防寒靴に用いられた毛皮」について鑑定をおこなった、垣内京香らの論考を見てみたい。彼らは「第二次大戦中、中国戦線（満州関東軍）の旧日本陸軍で使用された昭和十七年製防寒外套と防寒靴」を鑑定対象としている。防寒外套の測定から「動物個体由来したもの」が多く材料として用いられ、とくに「第二次世界大戦下の日本では、多くの家庭で飼育されていたイヌやネコなどの愛玩物が、軍需用の毛皮材料として強制的に供出されていた（井上、二〇〇八）<sup>二七</sup>」のだ<sup>二七</sup>。これらを踏まえると、〈男〉の外套の「郷愁を誘うような毛外套の匂い」を「軍需用の毛皮材料」の匂いと捉えても不自然ではないだろう。「郷愁」として〈僕〉に蘇るのは、かつて所属していた社会組織の記憶なのだ。このように捉えると、失職し、船

橋で「剣もほろろ」の挨拶を受け、電車内で巻き起こる笑いに信念を打ち砕かれた〈男〉に先立って、〈僕〉もまた敗戦という出来事に冷たく突き放されたと考えられる。

〈僕〉は「飲むものはインチキでも酔いは本物」だと話す。「酔い」は彼をどのようにして「退屈」から逃すのだろうか。伊藤信博は「酔い」について「心性としての変身願望」の存在を指摘し、「人は日常生活を生きる上で様々な不如意を抱えている。（中略）どうにもならない現実を抱えて、人は時として別の存在に成り変りたい、あるいは人生をやり直したいと考えるだろう。それが変身願望であり、酒の力を借りて酔うことはまさにその代償行為である。変身と言って言い過ぎであるとするれば、一時的な韜晦や逃避、日常から非日常への飛翔、離脱である」と述べた<sup>二八</sup>。

「酔い」は「別の存在に成り変りたい」といった「変身願望」または一時的な「逃避、日常から非日常への飛翔、離脱」の「代償行為」であり、〈僕〉の「酔い」もまた「心性としての変身願望」や、戦後空間からの「離脱」の願望のあらわれとして読むことができよう。

〈僕〉は、「偽物ばかり」の世の中に退屈しており、「偽物」と「本物」において甚だしい執着を見せるが、裏を返せば、「本物」の溢れた日々を知っている、と捉えられる。そして、それを〈僕〉の過去として読むことは、不自然だろうか。

「本物」とは何か、〈僕〉は語らない。相対的に示されているのが「偽物」の蔓延である。推測を繰り返すが、戦争が〈僕〉の現在に影を落としてしていると読めるとき、敗戦は〈僕〉に、束縛からの解放と追い求

めていた未来の消失をもたらしている。自分の意志に反して、未来に対する希望や展望を信じられていた日々から切り離された人物、それが〈僕〉なのではないか。めくるめく明日は、敗戦によって〈僕〉の目の前で幕を下ろした。その経験によって、現在の〈僕〉は「明日」を信じられなくなっているのだ。

敗戦後、方途をうしなつた〈僕〉は、「偽物」と「本物」などなく、ある一点を指して突き進んでいた過去の日々を「本物」として囲い込み、その地点への回帰の手段として、「酔い」を欲したのではないだろうか。過去への一時的な飛翔である「酔い」を繰り返すことで、喪われた未来の景色を行き来する〈僕〉の輪郭は暈けていく。「人物として必ずしも十分に描か」<sup>二九</sup>ない、つまり不鮮明に描くことで、「酔い」が映し出す景色に停滞し、滲み融けていく主体の姿をあらわしたのではないだろうか。

「酔い」とともに自身の記憶を何度も辿り直す〈僕〉の姿が見せるのは、過去に吊り下がりがり続け、明日を生きることに見切りをつけた、ひとつの生き方である。

現在の〈僕〉は「酔い」によつて過去へと旅立ち、戦時下に描かれた自身の未来を「本物」の姿として夢想する。回想として〈男〉の話を書き込むことで深められる、〈僕〉の「根底にある絶望」とは、敗戦による疎外であり、その化膿が「退屈」として「酔い」を反復させるのだ。

## 六、結論

「蜺」は、敗戦後日本を舞台として、今日を生き延びてはじめて明日を掴んでいくことができる、といった日々の姿を描いた。おっさんの姿が示すように、他者の今日を確保することはときに自身の明日を喪わせる。彼の過剰な義侠心が、リュックによつてもたらされるはずの明日を奪い去つたのだ。

〈僕〉の、「偽者ばかりが世の中にいる」といった退屈からの脱出としてこれまで求められたのが、「酔い」の反復であった。〈男〉との出会いを通じて、「蜺」の回想は退屈しのぎとして、外枠の語り手〈僕〉に語り直されるのであった。

「蜺」における笑いについては、おっさんが突き飛ばされたあと、乗客らの皮肉じみた笑いが車内に溢れ出す一方で、〈男〉のヒステリックな笑いは、おっさん（＝「義侠心の過剰な人物」）の死によつて、「善くいようと努めてきた」「過去の自分」の「善意」の卑俗化がもたらされたことで、自嘲や落胆の、共有不可能で孤独な笑いとして彼から噴き出しており、その強烈な対称性を示した。

失職した〈男〉は、他者から掠め取ることで明日を掴む。リュックを何度も捨てようと思つたのは、自身の明日が他者の今日を犠牲にしていることへのうしろめたさである。「闇屋に落ちるには俺は良識や教養があり過ぎる」と過剰な義侠心の持ち主としての己惚れを嘲り、自身の「背徳感」を滑稽なものとして蔑むことで、〈男〉の葛藤はついに良識や信念の放棄として結ばれる。「一人が幸福になれば、その量だけ誰かが不幸」になることでは生きていくことができない「醜

「悪」な「平面」の構図で、「浅まな善意や義侠心」を締出そうと決意する〈男〉の姿などからは、何らかの生命や信念が確保されるとき、代償として咄嗟にまた何らかが犠牲として弾き弾かれねばならないことが描かれていた。

〈男〉が外套を着用することで、「像」としての身体のもろさ」が補強され、彼の身体の「あやふやな輪郭」は「善人」として彫り込まれていく。外套の「釦」は〈男〉の「六つの誓い」と「出身やルーツに対する誇りの象徴」を担いながら、「標準語」の憑依として留められてきた。多くの標準語話者が行き交う生活圏に身を置き、〈男〉は「じぶんを見失わないで」いるために、標準語に自身を托した。

就職口のない〈男〉は、「欲しくなれば、(中略)力づくで剥ぎ取る」ことすら叶わず、他人の慈善なしには「女房子供が飢え」てしまう。停滞した現実と直面したとき、「力づくで剥ぎ取」った「贓品」の感触が、これまで「言い聞かして」いた心の姿勢を食い破り、「荒んだ勇氣」を喚起するのだ。彼の輪郭は標準語圏のなかにおいてふたたび薄らぎ、空虚な自己と言葉の揺らぎ、「無感動」への力ない抵抗として、女房のこぼれを怒鳴りつける。

「蜆」の〈僕〉はまるで物語に匿われているかのように、「酔い」ににおいてのみひらかれており、「偽者ばかり」の世の中を退屈に思う人物である。本稿では、〈僕〉を、過去に「本物」の溢れた日々を過ごした人物として読んだ。「蜆」の物語空間が「敗戦後日本」であることを踏まえ、〈僕〉の「郷愁」を呼び起こす〈男〉の外套の着心地と匂いは「軍需用の毛皮材料」がもたらしており、〈僕〉は敗戦という

出来事に冷たく突き放された人物であったのではないか。敗戦という疎外によつて未来への展望を喪失し、現在の彼は「明日」を信じられなくなった。方途をうしなつた〈僕〉は、ある一点を目指して猛進していた日々を「本物」として囲い込み、その地点への回帰として、「酔い」を欲した。「心性としての変身願望」や、戦後空間からの「離脱」、過去への一時的な飛翔を望み、「酔い」を繰り返す。〈僕〉は、人物としてあえて不鮮明に描かれることで、「酔い」の映し出す景色に停滞し続け、滲み暈けていく曖昧な輪郭が示されていた。

「蜆」結末部における、外套の釦の描写について、〈僕〉が〈男〉の外套に垂れ下がる釦を引きちぎつたのは、売り払われる直前になって、ふたたび着せてもらった外套の感触が過去を想起させ、かろうじて吊り下がる釦の姿が〈僕〉に余韻を残したためではないか。釦は、未来や展望を喪失した彼に重ねられたのであろう。しかし、釦には用途もなにもない。〈僕〉は釦を下宿の子供にやっつけてしまう。その子供が釦をお弾きにして遊ぶ姿も見なくなり、「もう飽きたんだろう」と〈僕〉は語る。釦は、下宿の子供の手先で十分に捏ねられて「飽きられ」ていく。「酔い」を繰り返して停滞する〈僕〉のように、過ぎ行く時間のなかで置き去りにされ、疎外された地平で停止し続けるのだ。

〈僕〉が〈男〉に対して「会いたい気持ちも別段起らない」のは、回想する限りにおいて「退屈」でないからだ。しかし、下宿の子供に渡つた釦のように、〈僕〉のこの回想もまたいつまでも退屈を凌ぎつづけられる、飽きがこない、とは断言できない。

豊島与志雄は随筆「風景」で次のように述べた。

あらゆる信念の崩壊を一度ぐりぬけてきた人々にとつては、遁走が発足であり、発足が遁走である。(中略)明かなのは現在が安住の地でないこと、そしてただ発足と建設。

彼はさらに、「目標不明の発足は彷徨に終り、内容不明の建設は徒勞に終る」と続けた。無論、〈男〉は「信念の崩壊を一度ぐりぬけ」たひとりであるが、先の章で述べたように〈僕〉もまた〈男〉に先んじて「信念の崩壊」があつた、そのような可能性を否定できない。〈男〉の遁走は「安住の地」を求め、闇屋へ転向することで発足された。一方、〈僕〉の遁走は「酔い」によつて発足されるが、目に見える標のないそれは彷徨に終わつてしまふだろう。

「蜆」は、自分自身を世間に織り込むために彫り込まれていた信念が、自身の本心や真実に基づくものであるかを問ひかけ、停滞した現実を前に信念から脱出するさまをシニカルに描いた。

自己の信念の真偽を判断できる材料が自身の手元にないまま懸命に信奉し続けることの危うさの一方で、結末部で〈男〉が「二人が幸福になれば、その量だけ誰かが不幸」になる空間として「今」を認識したように、外套やリュック、釦の所有の移り変わり、反復される〈僕〉の「酔い」などは、生き抜くために手放すもの、押合いへし合いしながら手放されたもの、手放してはいけないものが個人単位で意識されていくといった時世をも表していた。

〈僕〉は酔いを、〈男〉はリュックを担ぎ、「駅の前で手を振つて別れた」

二人は、今まさにその時間のなかを蠢いている。「醜惡」な地平で、「不幸に突き落」とされぬよう、〈僕〉は輪郭を融解させ、〈男〉は輪郭を凝固させながら生き延びていく。

- 一 戸塚麻子『戦後派作家梅崎春生』論創社、二〇〇九年。
- 二 三浦和尙「梅崎春生における「かるみ」——『蜆』の分析をもとに」、『愛媛国文と教育』(三十一)、愛媛大学教育学部国語国文学会、一九九八年七月。
- 三 渡部裕太「肯定し、探り続けること——梅崎春生「蜆」論」、『立教大学日本文学』(一一五)、立教大学日本文学会、二〇一六年一月。
- 四 前掲、渡部裕太「肯定し、探り続けること——梅崎春生「蜆」論」。
- 五 古閑章「梅崎春生の世相小説——飢えをキーワードとして」、『近代文学論集』(十八)、日本近代文学会九州支部「近代文学論集」編集委員会、一九九二年十一月。
- 六 前掲、戸塚麻子『戦後派作家梅崎春生』。
- 七 高木伸幸「梅崎春生研究 戦争・偽者・戦後社会」和泉書院、二〇一八年。
- 八 前掲、三浦和尙「梅崎春生における「かるみ」——『蜆』の分析をもとに」。
- 九 前掲、三浦和尙「梅崎春生における「かるみ」——『蜆』の分析をもとに」。
- 一〇 前掲、三浦和尙「梅崎春生における「かるみ」——『蜆』の分析をもとに」。
- 一一 籠碧「話を聴く語り手——シユテファン・ツヴァイクの枠物語とフロイトの精神分析」、『研究報告』(三十二)、京都大学大学院独文研究室研究報告刊行会、二〇一九年一月。
- 一二 前掲、渡部裕太「肯定し、探り続けること——梅崎春生「蜆」論」。
- 一三 前掲、籠碧「話を聴く語り手——シユテファン・ツヴァイクの枠物語とフロイトの精神分析」。
- 一四 前掲、渡部裕太「肯定し、探り続けること——梅崎春生「蜆」論」。

- 一五 柴原直樹「笑いの発生メカニズム」、『近畿福祉大学紀要』七(一)、二〇〇六年六月。
- 一六 前掲「三浦和尚」梅崎春生における「かるみ」——『蜺』の分析をもとに。
- 一七 前掲「三浦和尚」梅崎春生における「かるみ」——『蜺』の分析をもとに。
- 一八 鷺田清一「ちくはぐな身体」筑摩書房、二〇〇五年一月。
- 一九 前掲「鷺田清一」ちくはぐな身体。
- 二〇 前掲「鷺田清一」ちくはぐな身体。
- 二一 前掲「渡部裕太」肯定し、探り続けること——梅崎春生「蜺」論。
- 二二 前掲「高木伸幸」梅崎春生研究「戦争・偽者・戦後社会」。
- 二三 前掲「戸塚麻子」戦後派作家「梅崎春生」。
- 二四 前掲「渡部裕太」肯定し、探り続けること——梅崎春生「蜺」論。
- 二五 前掲「三浦和尚」梅崎春生における「かるみ」——『蜺』の分析をもとに。
- 二六 前掲「三浦和尚」梅崎春生における「かるみ」——『蜺』の分析をもとに。
- 二七 垣内京香ほか「旧日本軍用防寒外套および防寒靴に用いられた毛皮の鑑定」、『芦別市・星の降る里百年記念館年報』(二十二)、芦別市・星の降る里百年記念館、二〇一六年。
- 二八 伊藤信博「酔いの文化史儀礼から病まで」勉誠出版、二〇二〇年八月。
- 二九 前掲「三浦和尚」梅崎春生における「かるみ」——『蜺』の分析をもとに。
- 三〇 前掲「三浦和尚」梅崎春生における「かるみ」——『蜺』の分析をもとに。

〈参考文献〉

- 朝日新聞社『朝日クロニクル二十世紀完全版』第四卷、朝日新聞社、二〇〇一年。
- 伊藤信博『酔いの文化史 儀礼から病まで』勉誠出版、二〇二〇年。
- 高木伸幸『梅崎春生研究「戦争・偽者・戦後社会」』和泉書院、二〇一八年。
- 戸塚麻子『戦後派作家「梅崎春生」』論創社、二〇〇九年。
- 豊島与志雄『豊島与志雄著作集』第六卷、未来社、一九六七年。

- 鷺田清一「ちくはぐな身体」筑摩書房、二〇〇五年。
- 垣内京香ほか「旧日本軍用防寒外套および防寒靴に用いられた毛皮の鑑定」、『芦別市・星の降る里百年記念館年報』(二十二)、芦別市・星の降る里百年記念館、二〇一六年。
- 籠碧「話を聴く語り手——シユテファン・ツヴァイクの粹物語とフロイトの精神分析」、『研究報告』(三十二)、京都大学大学院独文研究室研究報告刊行会、二〇一九年一月。
- 古閑章「梅崎春生の世相小説——飢えをキーワードとして」、『近代文学論集』(十八)、日本近代文学会九州支部「近代文学論集」編集委員会、一九九二年十一月。
- 柴原直樹「笑いの発生メカニズム」、『近畿福祉大学紀要』七(一)、二〇〇六年六月。
- 三浦和尚「梅崎春生における「かるみ」——『蜺』の分析をもとに」、『愛媛国文と教育』(三十一)、愛媛大学教育学部国語国文学会、一九九八年七月。
- 渡部裕太「肯定し、探り続けること——梅崎春生「蜺」論」、『立教大学日本文学』(一一五)、立教大学日本文学会、二〇一六年一月。